

芳野懐古

藤井竹外

古陵の松柏天颯に吼ゆ

山寺春を尋ぬれば春寂寥

眉雪の老僧時々帚くことを輟め

落花深き処南朝を説く

【作者】藤井竹外(一八〇七〜一八六六年)・江戸後期の高槻藩士・漢詩人・大阪府高槻藩の名家に生まれる。人柄は大まかで気ままであった。銃砲の道に

通ずるなど多才な人であったが漢詩人として身を立たした。頼山陽に師事し、広瀬淡窓などとも交わった。特に七言絶句では高い評価がある。

晩年は官を辞して京都に住み、詩と酒を好んで悠々自適の生活を送った。享年六十歳。

【語釈】*古陵…ふるい御陵。ここでは後醍醐天皇の御陵。*松柏…松と柏ともに常緑樹。*天…天から吹くつむじ風。*山寺…山の中の寺。

では如意輪寺(後醍醐天皇の勅願寺)また南北朝時代楠木正行の足利軍との戦いの前に訪れ境内にある如意輪堂の扉に辞世の歌を鏤しやじりて刻んだ名高い寺。*寂寥…周囲が静かである。*眉雪老僧…眉毛が雪のように白い老僧。*輟帚…箒で掃いていくのをやめて。*南朝…室町時代初め南朝と北朝の対立抗争があり、後醍醐天皇の吉野入りより後龜山天皇が京都に帰るまでの五十七年間。

【通釈】吉野を訪ねて、後醍醐天皇の古い御陵の前に来ると、松や柏の木は強い風にうなり声をあげている。山中の如意輪寺あたりに春景色を尋ねてみると、桜の花は散り人影もなく静かである。眉毛のまっ白な老僧がしばらく掃くことをやめ、落花の散り敷いたところで南朝の物語をしてきた。【鑑賞】如意輪寺の老僧が南朝を説く。都から逃れてきた後醍醐天皇は吉野で崩御された。御陵・春嵐・山寺の字句を並べて「春寂寥」を描写しています。物寂しい叙景を表すと共に、昔ならばもとの華やかであったらうと懐古の情を連想させます。この詩は前半の句を風景、後半の句は老僧の動作を詠いながら悲しく哀れな昔の出来事をしみじみ思い出させる情感がこめられています。またこの詩は芳野を詠んだ傑作として河野鉄兜(こゝのてつと)ら、梁川星巖の作と合わせて芳野三絶といわれています。

う、梁川星巖の作と合わせて芳野三絶といわれています。